平安文学にみる
娘と親の絆

胡　潔 (HU, Jie)
名古屋大学大学院　国際言語文化研究科
日本言語文化専攻　比較日本文化学講座
2007.6.26

婿取り

娘に婿を取る婚姻形態

嫁取り (娶嫁婚)

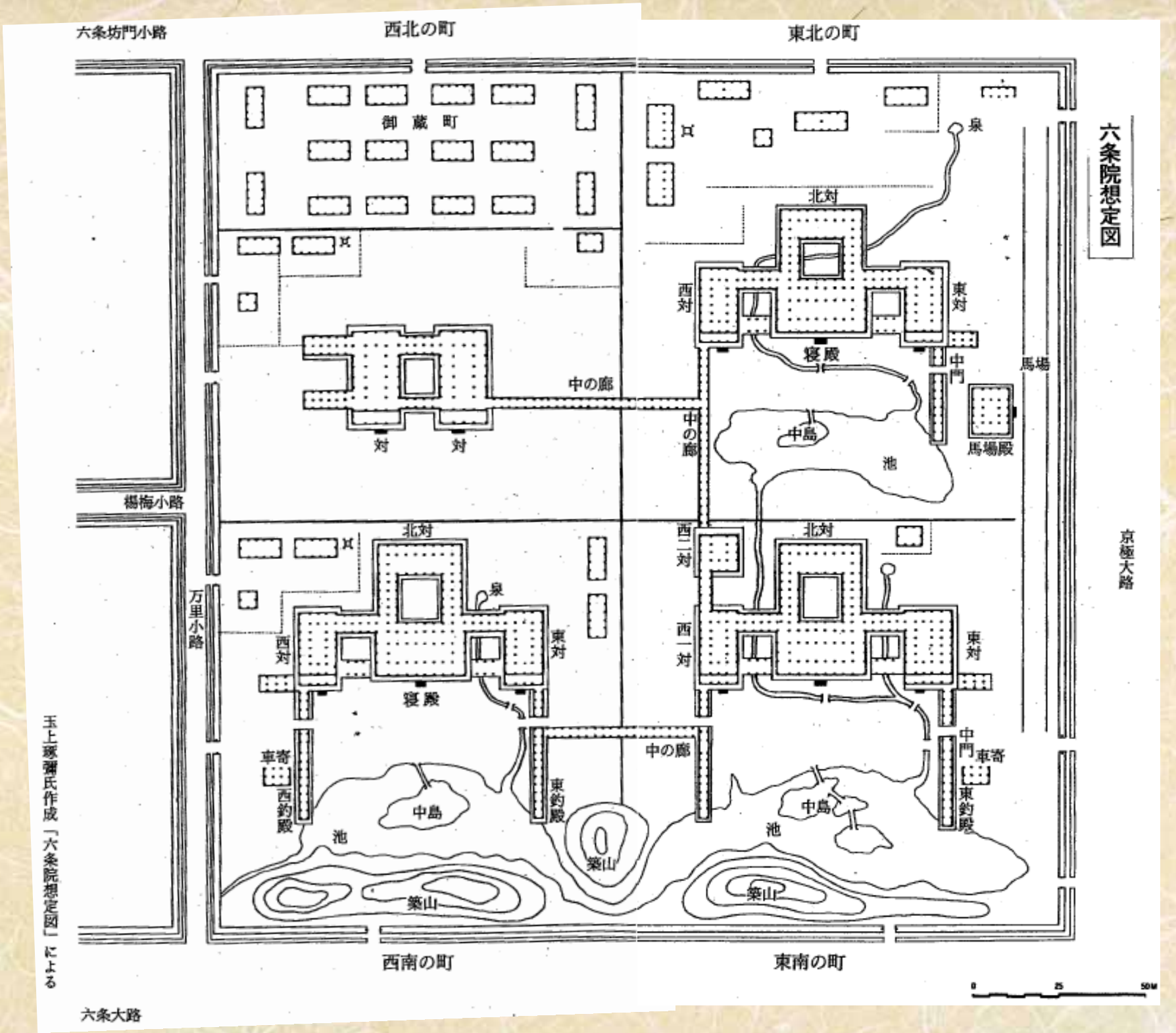
息子に嫁を取る婚姻形態

平安時代の居住形態

- ①夫婦別居（通い）
- ②夫婦同居
  （妻方居住・新処居住）

寝殿造

六条院想定図



玉上琢彌氏作成「六条院想定図」による

資料1 宇津保物語『藤原の君』巻

かくて、父母住みたまふ町には、寝殿にはあて宮よりはじめたてまつりて、こなたの御腹の若君たち、内裏の女御の御腹の女宮たちなど。みな、おもと人、乳母、うなゐ、下仕へなんど、かたち、心、ある中にまさりたるを選りさぶらはせたまふ。西のおとどは、女御の君の御方、東のおとどは、宮たちすみたまふ。父母、北の御方になむ住みたまひける。男君たちは、ある限り、廊を御曹司にしたまひて、板屋をさぶらひにしてなむありける。

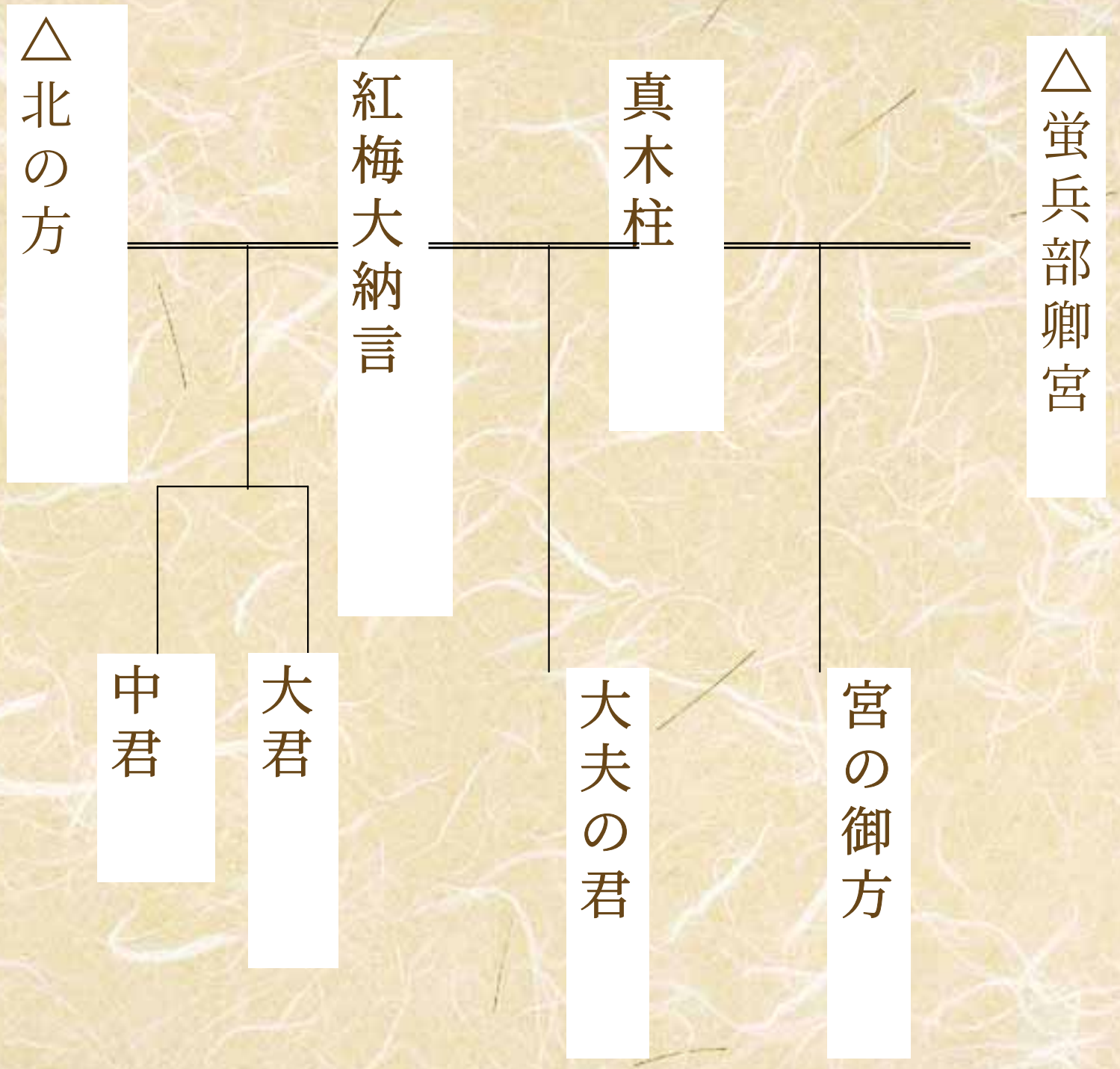
資料2 落窪物語』冒頭

今は昔、中納言なる人の、女あまた持たまへるおはしき。大君、中の君には婿どりして西の対、東の対に、はなばなとして住ませたてまつりたまふに、「三四の君、裳着せたてまつりたまはむ」とて、かしづきそしたまふ。また時々通ひたまふわかうどほり腹の君とて、母もなき御女おはす。北の方、心やいかがおはしけむ、つかうまつる御達の数にだに思さず、寝殿の放出の、また一間なる落窪なる所の、二間なるになむ住ませたまひける。君達とも言はず、御方とはまして言はせたまふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがに、おとどの思す心あるべしとつつみたまひて、落窪の君と言へとのたまへば、人々もさ言ふ。

資料３ 源氏物語『紅梅』巻

君たち、同じほどに、すぎすぎ大人びたまひぬれば、御裳など着せたてまつりたまふ。七間の寝殿広くおほきに造りて、南面に、大納言殿の大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませたてまつりたまへり。……

例の、かくかしづきたまふ聞こえありて、次々に従ひつつ聞こえたまふ人多く、内裏春宮より御気色あれど……「大納言」：人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ」思したちて、参らせたてまつりたまふ。


△蛍兵部卿宮
真木柱
紅梅大納言
△北の方
宮の御方
大夫の君
大君
中君

資料3 『源氏物語』「紅梅」巻

君たち、同じほどに、すぎすぎ大人びたまひぬれば、御裳など着せたてまつりたまふ。七間の寝殿広くおほきに造りて、南面に、大納言殿（の）大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませたてまつりたまへり。……

例の、かくかしづきたまふ聞こえありて、次々に従ひつつ聞こえたまふ人多く、内裏春宮より御気色あれど……「大納言」：人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ」思したちて、参らせたてまつりたまふ。

資料４　『宇津保物語』「嵯峨の院」巻

……今の世の男は、まず人を得むとては、ともかくも、『父母はありや、家所はありや』。洗はひ、綻びはしつべしや。供の人に物はくれ、馬、牛は飼ひてむや」と問ひ聞く。顔かたち清らにて、貴にらうらうじき人といへど、荒れたる所にかすかなる住まひなどして、さうざうしげなるを見ては、あなむくつけ、わがいたつき、わづらひとやならむと思ひ惑ひて、あたりの土をだに踏まず。

…例のあだ人なればと、ただに思はせむとてこそは。この君を、こちら親が時の財、櫛笥の何々も、惜しきものなく失ひ、こちらの年ごろ地子を待ち使ひつる近江の荘も、この君の御時にこど売りつれ、かう惑ひ仕うまつるかひありて、今日までめぐらひたまふは、いかにうれしきことなり。…

資料5　『源氏物語』紅葉賀巻

大臣も、かく頼もしげなき御心を、つらしと思ひきこえたまひながら、見たてまつりたまふ時は、恨みも忘れて、かしづきいとなみきこえたまふ。つとめて、出でたまふところに、さしのぞきたまひて、御装束したまふに、名高き御帯、御手づから持たせて、渡りたまひて、御衣の後ひきつくろひなど、御沓を取らぬばかりにしたまふ、いとあはれなり。

資料6　『源氏物語』賢木

中将が　かの四の君をも、なほかれがれにうち通ひつつ　めざましうもてなされたれば、心とけたる御婿の中にも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひいれず。

資料7　紀長谷雄　『貧女吟』

貧女吟。

紀納言

女有り女有り寡にして又貧し。年齢蹉跎たり病日に新なり。紅葉門に深くして行跡断え、四壁虚しき中に苦辛多し。本は是れ富家鍾愛の女、幽深窓裏養はれて身を成す。綺羅脂粉粧に暇無し、謝せず巫山一片の雲。年初めて十五顔玉の如し、父母常に言へらく「貴人に與へむ」と。公子王孫競ひて相挑み、月前花下慇懃を通はす。父母欺かる媒介の言、許嫁す長安の一少年。少年識無く亦行も無く、父母敬ふこと神仙の如し。肥馬輕裘と鷹犬と、毎日に群れ遊ぶ俠客の筵。交談扼腕常に招飲し、一日の費数千錢。産業漸くに傾く遊猟の裏、家資徒らに竭く醉歌の前。十餘年來父母亡せ、弟兄離散れ他郷に去る。聟夫相厭て相顧もせず、一たび去りて歸ること無く別恨長し。日往き月來り家計盡き、飢寒空しく送る幾風霜。秋風の暮雨斷腸の晨、古を憶ひ今を懐へば涙巾を濕らす。形は死灰に似て心は未だ死なず、怨を含めど追ひ難し舊日の春。單居影を抱く何れの所にか在る、滿鬢の飛蓬滿面の塵。落々たる戸庭に人も見えず、悲緒を披かむとすれど遂に因なし。語を寄す世間の豪貴の女に、夫を擇ばば意を看人を見ること莫れと。又寄す世間の女の父母に、願はくは此の言を以ちて諸れを紳に書せと。

資料8　白居易『議婚』

議婚

天下無正聲。悅耳卽爲娛。
人間無正色。悅目卽爲姝。
顏色非相遠。貧富則有殊。
貧爲時所棄。富爲時所趨。
紅樓富家女。金縷繡羅襦。
見人不斂手。嬌癡二八初。
母兄未開口。已嫁不須臾。
綠窗貧家女。寂寞二十餘。
荊釵不直錢。衣上無眞珠。
幾廻人欲聘。臨日又踟躕。
主人會良媒。置酒滿玉壺。
四座且勿飲。聽我歌兩途。
富家女易嫁。嫁早輕其夫。
貧家女難嫁。嫁晚孝於姑。
聞君欲娶婦。娶婦意何如。

議婚

天下正聲無し、耳を悅ばしむれば卽ち娛と爲す。
人間正色無し、目を悅ばしむれば卽ち姝と爲す。
顏色相遠きに非ず、貧富則ち殊なる有り。
貧しきは時の棄つる所と爲り、富めるは時の趨く所と爲る。
紅樓富家の女、金縷羅襦に繡す。
人を見るも手を斂めず、嬌癡二八の初。
母兄未だ口を開かざるに、已に嫁して須臾もせず。
綠窗貧家の女、寂寞として二十餘。
荊釵錢に直らず、衣上眞珠無し。
幾廻か人聘せんと欲するも、日に臨みて又踟躕す。
主人良媒を會し、置酒玉壺に滿つ。
四座且く飲む勿れ、我が兩途を歌ふを聽け。
富家の女は嫁し易く、嫁すること早うして其夫を輕んず。
貧家の女は嫁し難く、嫁すること晚うして姑に孝なり。
聞く君婦を娶らんと欲すと。婦を娶る意何如。